

「答えのない世界を生きる」 小坂井 敏晶 著 祥伝社 2017年8月発行

スポーツの世界でも所謂、文科系研究を継続している私にとって、心強く、勇気を与えてくれた一冊です。目の前の課題との向き合い方、物の見方、考え方の幅を広げてくれる知見が、实例をもとに表現されているので、皆さんにお勧めしたいと思います。世間でも有名な著書「社会心理学講義」にまつわる内容でもあるため、読み応え抜群です。

この本は出だしから特徴的で、「世界から答えが消え去った」という文章から始まります。私たち人間には「常識」というものが存在するかと思います。しかし、今までの常識もこれまで育ってきた環境の中での常識であり、一步外に出てみると、今までとは異なる常識がそこには存在することもあります。この内容から私の脳裏に思い浮かんだのは、『ただやみくもに情報を受け入れるのではなく、一度、自らの頭で考えることが重要なのではないか』という気づきでした。現代社会にはルールやフォーマットが緻密に用意され、大人になればなるほど考える機会が減ってしまうのも事実です。

読み進めていくと、なぜ自分の頭で考えることが必要なのか、なぜ人は考え続けなければいけないのか語られています。その中でも私が印象に残っている項目があります。一つは、

「答えではなく、問いを学ぶ」

です。この言葉には感銘を受けました。自ら問題意識を持ち、自主的に頭を働かせようと試みしてみることの重要性が指摘されているためです。大人数で同じ時間、同じ空間で勉強や練習をしていたとしても、自分の中で現象に問いを立てる習慣がついている人は、考えていない人に比べて伸びしろも大きいはずです。問いを立てることができる人は、目標設定が具体的に表現できることにつながり、やるべきことがはっきりとするからです。

文中のこんな言葉も印象的です。

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや(えんじゃくいづくんぞこうこくのこころざしをしらんや)」

この言葉の意味は、「大人の小さな器で若い力を判断してはいけない」ということです。教育に携わっている身としても、日々成長する若い新しい芽を摘んでしまわぬよう注意しなければいけません。立場や年齢といったファクターにより、思考することがおろそかになってしまうと、判断が鈍り、相手にとっても自分にとっても良い現象は起きないでしょう。

簡単な紹介にはなりましたが、この本では、大人になっていくにしたがって正解を決めつけてしまうことの弊害、思考することをやめてしまった現代社会の影について描かれています。「考えさせてくれる」項目もありますので、ぜひ、手に取ってみてください。生きている以上、答え

だと思っていたことも変化していきます。環境，年齢，性別などといった枠組みに縛られることなく思考し続ける楽しさや，奥深さも見えてくると思います。私はこれからも「問いを学ぶ」ことを実行していきたいと思います。皆さんも自分ならではの問いを立て，「自分らしさ」を構築していきませんか。